


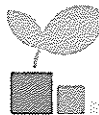




報道発表資料の配付日時 10月1日(木) 13時00分

発表項目 (行事名)		ほっかいどう未来チャレンジ基金 「みらチャレ通信」Vol. 36の発行について	
記者レクチャー のお知らせ	(実施日時)	発表者	
		発表場所	
概要	<p>北海道の未来を担う若者達の海外挑戦を応援するため、平成28年12月に創設した「ほっかいどう未来チャレンジ基金」。この基金により海外に留学した方々の活動状況などをお伝えする月刊紙「みらチャレ通信」Vol. 36を発行しました。</p> <p>■掲載内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・インターンシップ先企業にて第3期生の立花さんが成果報告を実施しました ・第3期生の留学成果報告 学生留学コース 有働 篤人さん 学生留学コース 海辺 菜々美さん <p>■主な配布先 応援パートナー（企業、団体等）、道内大学等 ※基金ホームページにも掲載しています。</p> <p>■発行時期 毎月下旬</p>		
参考	ほっかいどう未来チャレンジ基金 公式Facebook「みらチャレ」 https://m.facebook.com/mirachalle/ 基金生の海外での活動状況等を随時掲載しています。 <div style="float: right; text-align: center;">  <small>公式Facebookページ みらチャレ</small>  </div>		
報道（取材） に当たって のお願い	助成対象者の海外留学の状況を情報発信することにより、道内の若者の海外挑戦に向けた機運醸成と、寄附などオール北海道での応援体制の構築を図っていきたくので、積極的な報道にご協力よろしくお願ひします。		
他のクラブ との関係	同時配付 同時レク	(場所)	
担当 (連絡先)	総合政策部政策局総合教育推進課 工藤 電話：ダイヤルイン 011-206-7380 (内線 23-109)		



北海道に貢献する意欲のある若者の海外挑戦を、官民一体で応援する「ほっかいどう未来チャレンジ基金」の旬な情報をお届けします！9月末時点で、第3期生2名が北海道特派員として引き続き海外で活動中です！

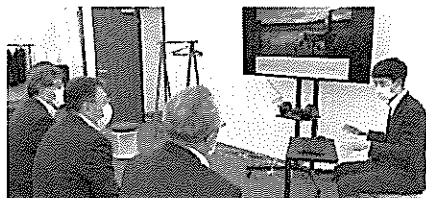
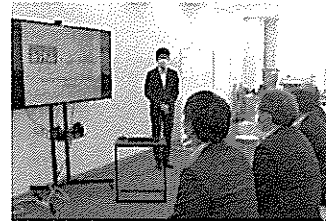
○インターンシップ先企業にて第3期生の立花さんが成果報告を実施しました。

ノルウェーに留学した第3期生の立花洋太郎さん（北海道教育大学）が令和2年（2020年）9月17日（木）に留学前にインターンシップを行った企業（株式会社HARP様）にて成果報告を行い、留学で学んだ内容や生活体験を説明し、参加者と活発な意見交換を行いました。

立花さんはノルウェー・ベルゲン大学での勉強と、フィールドワークで現地高校に自らアポイントメントを取り、施設見学、授業参観、教職員・生徒へのインタビュー調査を実施することにより、現場を実際に見ないと分からない日本とノルウェーの違いに気づき、大変勉強になったと話していました。

参加者との質疑応答では、「日本と大きく違う点、印象に残ったことはありますか」という質問に対し、「日本の先生は、まだICTの利用に抵抗感がある印象だが、ノルウェーの教育現場ではPCなどICT環境がないと授業にならない状態」と回答し、授業で紙のノートを取る人が少ないこと、紙の教科書の使用もほとんどないことなど、ノルウェーの教育現場について説明しました。

立花さんは、「留学した経験を北海道にどう還元しますか」という質問に、GIGAスクール構想の推進で、教職員がICTツールを使いたいけど理想的に使えないという問題などがあるので、そこで自分の学んできたスキルが活かされればいいと思う」と答えました。



参加者からの声

株式会社HARP 取締役総務部長 山崎 記敬 様 ※株式会社HARP様は「ほっかいどう未来チャレンジ応援パートナー」です。

留学による人間的な成長が大いに感じられたことはもちろんですが、ノルウェーのICT教育に対する考え方や環境、体制など、日本とノルウェーの違いにとっても驚きました。

次は留学で学んできたことを北海道の教育現場で生かして、北海道におけるICT教育のリーダーとしてご活躍されることを楽しみにしています。

北海道教育大学 学務部国際課係長 田口 恵里奈 様

生き活きとしたプレゼンにより、ノルウェーと日本の教育制度の違いについての報告や、将来日本に取り入れたい教材や取組について発表を行う立花さんの成長ぶりに驚かされるとともに、嬉しい気持ちでいっぱいになりました。もともと立花さんはとても優秀な学生さんですが、みらチャレ制度は、単に海外の大学へ留学を行うだけではなく、自ら実践活動先と交渉し調査を行うという過程を経ることで、さらに自信を身に付けて成長することができるのだと、たくましくなった姿を見て、強く感じました。

立花さんの益々の活躍に期待するとともに、今後も本制度を通じて、たくさんの若者が夢を持って留学にチャレンジし、自らの未来を切り開く姿を見守っていきたいと思います。

発表を終えて～第3期生 学生留学コース 立花洋太郎さん～

ご協力いただいた（株）HARP様をはじめ、大学や北海道の関係者の皆様には大変貴重な機会をいただき感謝を申し上げます。今回、自身が経験したことを発表する機会をいただいたことで、留学後どのように経験を生かすべきか明確になったとともに、今まで学んできたことを整理し、一つの形として発表することができました。今後はみらいチャレンジ基金へ私なりの「恩返し」として北海道のICT教育の発展に貢献していきたいです。

【立花さんの留学について】

【留学先】ノルウェー 【留学期間】2019年8月～2020年1月（6か月）

ものづくり産業を支える人材育成のため、ICTを活用したものづくり教育を学ぶ

【留学概要】

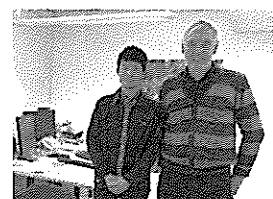
ノルウェーのベルゲン大学で主に北欧諸国の教育に関する歴史や、移民教育、これからの社会や経済と教育との関わりについて学びました。実践活動ではICT教育事情視察のため、ベルゲンの高校3校にアポイントメントをとり、施設見学、授業参観、生徒や先生方へのインタビューを行いました。

【留学を通じて感じたこと】

留学を通じて歴史的背景、ヨーロッパ特有の社会制度などから教育に対する考え方が日本とは共通点もありますが異なるところも多いと感じました。実践活動では日本と比べ、国や自治体単位でICTの教育活用に向けて整備が進んでおり、高校でも制服や文房具と同じように「必要不可欠なもの」としてパソコンやタブレットが活用されておりました。

【帰国後の活動・今後の目標】

留学後は北海道でのさらなるICT教育の普及にノルウェーでの知識を生かして貢献したいと考えております。そのため大学生のうち北海道のICT教育について調査・研究を進めたいと考えております。卒業後は更に専門的な知識を得たり、ICT教育の効果などを検証し、ICT教育に関わる分野で活躍したいです。



【現在北海道教育大学4年生】

●第3期生の留学成果報告 ～留学を終え帰国した第3期生の成果報告を紹介します～

学生留学コース 有働 篤人さん 【留学先】フィンランド【留学期間】2019年9月～2020年5月（9か月）

札幌を世界のデジタル観光都市にするため、ソフトウェア開発を学ぶ

【留学概要】

国としてゲーム産業を推進しているフィンランド有数のモバイルゲーム会社であるFingersoft社でのインターンでゲームなどのソフトウェア開発能力を向上させ、ゲーム制作をはじめとしたクリエイター活動の火種がある札幌から北海道を活性化させるヒントを見つけました。

【留学を通じて感じたこと】

EU国間での往来のしやすさもあり、国を越えたクリエイター同士の繋がりが積極的に行われていました。特にインターンで訪れたイギリスでのモバイルゲーム開発者イベントでは、自作のゲームをビジネスにしたい者が世界中から集まってきており、ゲーム業界は、すでに制作能力だけではなく発信力が問われていると感じ取ることができました。

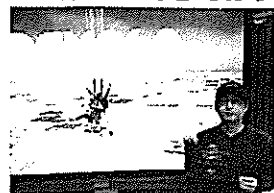


【現在北海道大学大学院博士1年】

【帰国後の活動・今後の目標】

ソフトウェア開発手法の発信と札幌からクリエイターが発信できる地盤づくり

帰国後の事後インターンでは、留学先で身に付けたソフトウェア開発能力を他の人へ教えることで、今時のゲーム開発の手法を発信しました。昨今は新型コロナウイルスの影響で、留学中に見学したようなイベントを行うことは非常に難しく、発信の手法も限られてしまいましたが、クリエイター自身が札幌を発信地とするような地盤を作っていく手立てを考えていきたいです。



学生留学コース 海辺 菜々美さん 【留学先】カナダ、アメリカ【留学期間】2019年9月～2020年3月（6か月）

北海道の地域資源を活かした観光振興のため、アラスカでアドベンチャーツーリズムを学ぶ

【留学概要】

地方も主役の観光立国北海道を実現するために、アメリカ合衆国・アラスカ州・パーマ市でアドベンチャーツーリズムについて調査・研究を行いました。需要側のニーズと供給側の意識のギャップに注視しながら、ボランティアとフィールドワークを行いました。

フェアバンクスに2週間滞在した際には、観光業関係者へのインタビューとインターンシップを行い、より実践的にツーリズムについて学びました。

【留学を通じて感じたこと】

北海道と類似点が多いアラスカ州では、人の手で新しく観光の目玉になるものを作らずに、残っている自然、身近な産業や歴史を観光に繋げていました。私たち道民にはあまりにも近すぎて観光商品としてあまり注目されていなかった農業や漁業の体験型・学習型観光としての可能性に気が付くことができました。



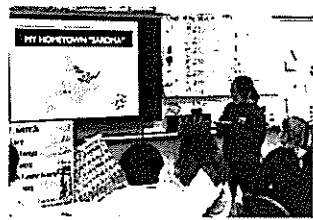
【現在北海学園大学4年生】

【帰国後の活動・今後の目標】

道内各地域とのつながりを重視した観光立国北海道に貢献

帰国後は新型コロナウイルスの影響で、活動報告会などの活動実施を見合わせている状況ですが、事後インターンシップの際に、留学先で学んだホスピタリティを実践することができました。

道内各地との結びつきを強化し、観光流動を作ることで北海道全体の活性化に貢献するというビジョンを掲げた道内企業から内定を頂いたため、これからも地域とのつながりを重視した観光立国北海道の実現を目指し続けます。



帰国した基金生の活躍機会や、活用できる場の提供などございましたら、ぜひ下記（総合教育推進課）に御連絡ください。

応援パートナーの皆様

(2020年9月現在・敬称略)

武田 孝 (拓殖工業(株)代表取締役会長) 有末 真哉 石川 諭史 遠藤 光二 小黒 敬三 坂詰 貴司 佐藤 友昭 (税理士法人FULL SUPPORT 代表社員税理士)
鈴木 伸明 船津 秀樹 山田 義勝 その他匿名希望の個人・企業5者